

2歳児と自然のかかわり (1)

— Y子の行動観察より —

斎藤 健司¹⁾*・高月 教恵¹⁾

1) 新見公立短期大学幼児教育学科

(2018年11月21日受理)

本研究では2歳児と自然との関わりについて、担任による1年間の行動観察記録をもとに考察を行った。その結果、観察対象の子どもに、自然への興味や、五感(視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚)の育ち、生き物をいたわる心、人間関係の変化などが見られた。園での自然体験や他者との交流が、粘り強さ、協調性、自制心、感謝する力といった非認知能力を培うことに影響を与えていると考えられる。

(キーワード) 乳幼児、保育内容「環境」

1. はじめに

これまでの社会では、決まった答えを持つ課題に向かって効率よく進む力が重要視されてきた。しかし、今の子どもたちが大人になるころには、複雑で予測困難な課題に向き合う力が重要になってくる。

野村総合研究所、MA Osborne、CB Freyの共同研究の結果、現在の日本の労働人口の約49%が就いている職業は、2025~2035年に人工知能やロボット等に代替可能と推計された(野村総合研究所 2015, Freyら 2013)。人工知能やロボットの急速な進化が、人間の職業を奪うのではないかと、または、今の教育や保育は時代が変化したら役に立たなくなるのではないかとといった不安を裏付ける未来予測である。

この未来を生きることができる人物は、社会の変化に主体的に向き合い、試行錯誤をしたり他者と協議をしたりして新たな価値を生み出す資質や能力を持った者である。未来を生きる人材を育てるため、教育や保育において、目標に向かって粘り強く挑戦する力、他の人と協調して取り組む力、感情をコントロールする力などを培う必要がある。これらの力は、非認知能力と言われている。非認知能力は、漢字テストや計算ドリルなどで数値化される認知能力と違い、能力の測定をすることが難しく、目に見えにくい。しかし、近年、非認知能力に関して新たな知見が得られている(Heckman 2000, Heckmanら 2007, 戸田ら 2014, 西坂ら 2017)。Heckmanは、乳幼児期の非認知能力と認知能力を相乗的に高めるための教育投資こそ、将来のリターンが最も効率的であると述べている(Heckman 2000)。また、西坂らが3歳児から5歳児を対象として非認知能力を調べた結果、非認知能力は3歳から5歳にかけて発達し、特に遊び

や生活への意欲、自己抑制、生活力、言葉による自己主張などは女児において発達が進んでいることが明らかになった(西坂ら 2017)。

このように乳幼児期に非認知能力を培うことの重要性が高まってきた。そのため、保育者は次のような適切な環境を構成してあそびを通して非認知能力を培う必要がある。例えば、園児が友だちと協力しながら成功と失敗を繰り返して何かを実現する喜びを知ったり信頼関係を培ったりできる環境や、いろんな人と共に遊ぶことで楽しさ、けんか、トラブルを経験し、規範意識やルールを学ぶことの大切さを学んだりすることができる環境などである。これらを引き出す豊かな環境を構成して子どもと接することで非認知能力を培うことができる。

西坂らは3歳児から5歳児を対象とした研究において、非認知能力は3歳から5歳にかけて発達することを明らかにした。この結果から、3歳未満児でも非認知能力またはその芽生えが始まっているのではないかと推測される。高月は、子どもと自然との関わりについて、子どもの心の育ちと、保育者の関わりについて研究をしている(高月 2002a, 2002b)。しかし、対象が0~1歳児のみであったため、本研究では2歳児に焦点を合わせ、担任による1年間の行動観察記録をもとに考察を行い、非認知能力の実態を探った。

2. 方法

1) 観察方法

観察対象の子どもは、岡山県のX保育園(1歳児クラス10名、2歳児クラス16名、3歳児クラス16名、3・4・5歳児混合クラス17名、園児総数59名、職員12名)の2歳児クラスのY子(9月13日生)である。4月当初のY子は、少しのことを怖

*連絡先: 斎藤健司 新見公立短期大学幼児教育学科 718-8585 新見市西方1263-2

がったりわがままを言ったりしている。思ったことを言葉で表現することができ、気の合う友達と遊ぶこともできているが、おもちゃの取り合いや順番争いでトラブルも多く見られる。様々なことに興味関心を持っているが、動く小動物は怖い。

観察記録は、Y子の保育者(担任)が園で共に生活する中で、平成12年4月から1年間のY子と2歳児クラスの子どもの様子を、自然とのかかわりを中心に記録した。この期間中、毎月1回、筆者の高月と岡山県Z地域13保育園の代表保育士(観察者を含む)で研究会を開催し、観察記録に基づいて検討を行い、子どもの育ちと保育者のかかわり(環境構成等)について記録を整理した。

本稿では、男児を○男、女児を○子と表記した。年齢が記されていない子どもは、Y子と同じ2歳児クラスの子どものみである。

2) 倫理的配慮

調査対象者および保護者および園には、文章および口頭で、研究の趣旨、記録と公表の方法、個人情報の保護を説明し、調査への参加は任意であり、不参加によって不利益を受けないこと、観察記録を報告書や論文等として公表することはあるが、個人が特定、推測されるような可能性がある方法で公表することはしないことを伝え、口頭で同意を得て調査を行った。

本稿では園および園児が特定されることがないように、園名および園児名のアルファベットはランダムにつけて表記している。

3. 結果と考察

事例1 4月の様子

観察日：4月

4月13日(木)：Y子は、園庭南フェンス沿いの空き地に行き、草を抜いている。Y子は、「くさ、とったー。ここにあったー。」と言いながら抜いた草を保育者に見せる。保育者は、「そう、あったねー。草どうする?」と言う。Y子は、「A子(1歳児)にあげる」と言って、そばにいたA子に草をあげようとする。しかし、A子は草に興味がなく、受け取らない。

M男(2歳児)がY子のそばに来て草を抜く。M男の抜いた草は、湿った土から抜いたため、根に土が多くついていた。M男は、「はい、Y子ちゃんのおおきいでしょう。」と言ってY子に渡す。Y子は、M男からもらった草を「ほーらー。」と言いながら投げる。その様子を見て保育者は、「あらー。ほら、草(ホトケノザ)に花がついとるよー。ピンクの花、きれいねー。」と言う。Y子は、「ピンクのはな? あー、みてー(見て)。」と言って、捨てた草の花だけを取って保育者に見せる。保育者は、「あー、かわいいー。」と言う。Y子は花を取った残りの草を、「これおおきい、ほいしたん。」と言って、フェンス下に流れてい

る川に捨てる。保育者は「川に捨てるよ、お魚さんがじゃまで泳げないよー。」と言う。Y子は、へっへっと笑いながら捨てるのをやめる。

4月22日(土)：園庭の隅に桜の木があり、桜の花びらがたくさん散っている。Y子、R子、U子と3人で花びらを拾い集めている。Y子は、「みてーみてー。」と言いながら保育者に見せる。

Y子は、R子が「おはな、ポケットいれとくん(入れる。)」と言うのを聞いて、自分も花びらをポケットに入れる。また、花びらが風で散る様子を見て、「くるくるまわりよー。」と言う。保育者は「いいね。たくさんあってー。」と言う。Y子は、「あーすてき。たくさん。U子ちゃん、ぼけっとにいれときねー。」と言う。

花びらの他に、葉も落ちているのを見てU子は、「はっば、ちった、ちった。」と言う。保育者は「葉っぱは、これから大きくなるのよ。」と言う。Y子は、葉を拾って「ちっちゃいのー。ちっちゃいはっぱー。」と言う。保育者は「それどうするの? 持って帰るの?」と聞く。Y子は「うん。」と言う。M男が近づいてくる。Y子は、「M男くんも、M男くんもいれてかえりー。」と言うが、M男に「いらん。いらん。」と断られる。保育者が、M男が拒否したことについて「いらん言うたなー。」と言って、残念な気持ちを感じさせる。Y子は、「うん。Y子ちゃんももってかえる。」と言う。Y子は、ポケットに桜の花びらをたくさん入れ、時々ポケットに手を入れて触っている。

【考察】

2歳7か月のY子は、神経質で少しのことを怖がったり、わがままを言って大泣きをしたりする。自己中心的であり、相手の気持を考えていない行動が多く見られる。例えば、A子の気持ちを考えずに草をあげようとしたり、M男からもらった草を捨てたり、川に捨てたりしている。

Y子は、桜の葉を拾って集めることで充実感を得ている。ポケットに入れて持ち帰りたいと思うほど喜んでいる。この気持ちをM男にも分け合おうとして「M男くんもいれてかえりー。」と言うが、「いらん。いらん。」と断られている。

このようにY子は、数々の衝突や摩擦を経験して、様々な感情を体験している。

草抜きをしているY子は、根に土がどれくらい付くのかということに興味を持っていた。しかし、保育者の言葉がけから花にも興味を示した。ただ、そこから花集めになったり、ままごと遊びになったりするなど、花への興味が深まることはなかった。桜の葉を拾っているときも、そこから遊びに発展するのではなく、単純に集めることに興味があったようである。

事例2 テントウムシ、青虫 観察日：5月、6月

5月22日(月)：砂場でY子、UR子、U子が遊んでいる。保育者がU子の帽子にテントウムシがとまっているのを見つける。保育者は、「みてー。U子ちゃんの帽子にテントウムシがとまるとるよー。」と言う。U子は不安げに保育者を見る。U子の帽子のテントウムシが逃げないのを見て、Y子は「にげんなー(逃げなさい)。」「と言う。保育者は、「にげんなー。にげねーゆうてやり(逃げなさいと言ってごらん)。」「と言う。Y子は、「てんとうむし、こら。」「と言う。保育者が「動かんよー。ちょっとさわってみたら。」「と言う。Y子は「いやー。UR子ちゃん。さわってみねー(触ってみて)。」「と言う。保育者は女兒が誰も触らないので、「M男君を呼んでくるか?」「と言う。Y子は「うん。」「と言って呼びに行く。M男のかわりに砂場で遊んでいたU男が来る。U男が来ると、突然、テントウムシが飛んだので、Y子は驚いて「とんだー。あっちいったー。」「と言う。しかし、ほっとした表情になる。Y子は、「あのなー。あんなどこ、とまるとるよー。」というので、保育者が「見に行ったら?Y子ちゃんテントウムシ見に行こう。」「というが、Y子は無言で砂遊びに戻る。

6月1日(木)：保育者が砂場で見つけた青虫を子ども達に見せる。Y子が「みせてー。」「と言う。保育者は、手のひらの青虫が落ちそうなので、バケツの中に入れる。Y子は「うごいた、うごいた。」「と言いながら、砂をかけたたり触ったりする。保育者は「青虫さんが砂をかけたら嫌と言とるよ。目が見えんようになるよ。」「と言う。U子にも「だめ。いけんいけん。」「と言われる。その後、他の子が青虫に砂をかけるのを見てY子は、「かけたらいけませんかなー。すなれないでー」と言ってとめる。

保育者は青虫をケースで飼うために、バケツに青虫を入れて部屋に入る。Y子は青虫を見ようとM男と押し合いになり転ぶ。保育者は青虫の泥を払って入れ、「何になるかなー。また見てあげようね。」「と言う。Y子は、「うん。」「といい、保育者が青虫をケースに入れるのを見届けたのち遊びに行く。

【考察】

Y子は怖がり、動く小さな生き物が苦手である。テントウムシがU子の帽子にとまっているのを怖そうに見て触ろうとしない。テントウムシが飛ぶとびっくりするがほっとして、保育者に誘われても追いかける気はなく、砂遊びにすぐに戻っている。また、保育者が砂場で見つけた青虫には砂をかけていることから、Y子は怖い気持ちで砂をかけて青虫を隠そうとしている様子がうかがわれる。しかし、触ったりしていることから、青虫に興味がある様子もうかがわれる。保育者に、青虫に砂をかけることはいけないことだと注意され、友達が砂を入れようとするのを止めていることから、それがいけないことに気付いたと思われる。

事例3 カタツムリ、ダンゴムシ 観察日：6月、7月、8月

6月29日(木)：朝、Y子が母親とともに登園してくる。朝の挨拶後、母親と離れたがらないY子に向かって保育者が「Y子ちゃん、おはよう。かたつむりにキュウリあげたんよ。食べてる?」「と言う。Y子はカタツムリのケースを両手で持ち、独り占めにしてのぞき込む。他の子もカタツムリを見ようと集まってくる。Y子の母は「Y子ちゃん、ほら、みんなにもみせてあげ。」「と言いながら帰る。保育者はそばでその会話を聞いている。Y子は蓋に付いているカタツムリを見て、「わー。いる。M男もいろうてみ(触ってみて)。T男はみちやいけん(見たらだめ)。M男だけ。」「と言いながら、見ようと寄ってきたT男を押す。保育者は「T男にもみせてあげて。」「と声をかける。Y子は一緒に見る。その姿を保育者は見守る。

Y子は「あー、つのがでた。」「と言う。その時に蓋が落ちる。Y子は、「おちたでー。かわいそう。Y子ちゃんひろって入れる。」「と言って、蓋に付いたままのカタツムリを拾って入れる。保育者は蓋にカタツムリが挟まらないようにY子を手伝う。

7月10日(月)：園庭のプランターの下でD男がダンゴムシを見つけ、Y子はU子、A子、保育者と一緒に見に行く。保育者は「たくさんおったなー。」「と子ども達に声をかける。Y子は「ダンゴムシ。」「と言いながら手の平に載せて見る。しばらく触ったり見たりしていたが、砂場の茶碗を見つけ、その中に入れる。保育者は茶碗の中で動いているだんご虫を見て、その様子をY子と話す。他の子たちが覗き込むとY子は、「いけんいけん。Y子ちゃんの。」「と言って見せない。その後、20分間ほど茶碗に入れたダンゴムシを大事そうに持って、砂場に行ったり部屋の前のテラスに行ったりして観察していた。保育者はそれを見守る。

8月2日(水)：Y子はカタツムリがケースから出て、窓の棧にいるのを見つける。M男が、「でんでんむし、おらんでー。みせてー。」「と言いながらY子を押す。Y子は、「ここからみえるが(見えるよ)。」「と言う。M男が「でんでんむし、おった。ここおったでー。」「と言う。Y子はM男と押し合いながら「M男くん、いや。」「と言う。

保育者が、「さようならして、いいかなあ?」「と言うと、Y子はカタツムリを指で押した。すると、カタツムリは下の土の上に落ちた。Y子は、「Y子ちゃん、さようならしてもうた。あそこ、おちたら、でてこん?でてくるん?」「と言って、落ちたカタツムリの頭が出てこないことを気にする。しばらくしてカタツムリが頭を出すと、Y子は「でてきたー。」「とほっとした様子で言う。保育者は「よかったね。さよならしよう。」「と言う。Y子は、「もういっかい、さようなら。」「と言う。

【考察】

Y子は、ダンゴ虫を20分間じっと見たり、カタツムリを触ったりしていることから、Y子の小動物の怖さは少しずつ薄れ、興味の方が勝ってきている様子がうかがわれる。また、雨が降っている外にカタツムリを落として、頭が出てこないのをじっと見て、頭が出てくると喜んで様子から、Y子のカタツムリに対する思いやりも感じられる。

しかし、Y子はカタツムリやダンゴムシを独占しようとしたり、「M男もいろいろてみ。T男はみちゃいけん。M男だけ。」と言いながら友達に差をつけたり、押し合いや奪い合いや順番争いでトラブルになったりしていることから、まだ自己中心的な様子もうかがわれる。

一般的に2歳児は、相手の立場に立ってものを考える想像力が未熟である。そのため、周囲と共に生きようとする心よりも自己を表出する心の方が強く出てしまい、喧嘩やトラブルを引き起こす。Y子は、喧嘩やトラブルを繰り返しながら、友達との距離や規範意識などを学んでいると思われる。

事例4 カエル、カブトムシ 観察日：8月

8月3日(木)：Y子は、飼育していたオタマジャクシが次々にカエルになっている様子を見ながら「たべよう。あがってきよう。」と言う。容器の中で動いているカエルを手の平に載せたり指で触ったりしている。Y子は、「かえるさん、とぶで一。あれ、あら、ひつついとる一。あー、うごいた。」と言いながら遊んでいる。保育者は「あんまり触るとカエルさんが怖がるから、もう逃がしてやろうと思うんだけど。逃がしてもいい？」と言う。保育者は花壇の所にみんなとカエルを連れて行く。Y子は「ここのはっぱのうえ。」と言いカエルを葉の上に置く。しばらく見ているが、なかなか動かないカエルに「おきなさい。」と言う。カエルが飛ぶと、「おー。おきたおきた。いった一。さようなら。」と言って、しばらくカエルの行方を見て部屋に戻る。

8月7日(月)：飼育していたカブトムシの雄がケースの中で動かないことを保育者が子ども達に告げる。M男が霧吹きで動かないカブトムシに水をかける。A子が触りながら「しんだ一。」と言うと、Y子は「うごかん。ねとるが一。うごきなさい。」と言って持ち上げたりする。M男はケースをとんとんと叩く。Y子はカブトムシを手を持って落とし「ころんだ一。」と言ったり、動かして「ばっくする。わはは。わー。」と少し笑ったりする。1歳児たちが見に来ると、Y子は「わわ。わわ。わーわー。」と言いながらカブトムシを手を持って見せる。死んだカブトムシでいつまでも遊びそうなので、保育者は「死んでから埋めてやる？」と言う。Y子は「うん。えーと、あそこ。はな。はな。」と言って花壇の方を指さす。保育者は

カブトムシを花壇の土に埋める。

【考察】

Y子はカエルを手の平に載せたり指で触ったりしていることから、興味関心をもってカエルに親しみを感じている様子がうかがわれるが、カエルを自然に戻してやろうという気持ちはまだ持っていない。しかし、保育者の言葉がけで、進んでカエルを自然に戻して行方を見守っていることから、カエルを愛おしく思っている様子もうかがわれる。

カブトムシの死に対してY子は、「動かない」「寝ている」「転んだ」と表現したり、「ばっくする。わはは。わー。」と言って少し笑いながら遊んだりしている様子から、生き物の「死」はまだ理解できないようである。

事例5 鈴虫 観察日：9月

9月21日(木)：保育者が「飼育していた鈴虫を逃がしてやろう。」と言う。保育者が飼育箱の蓋を開けると、多数は生きていたが数匹は死んでいた。他の子たちの「あーしんどる。」という言葉や保育者の言葉にもY子は無言で見ている。保育者は「卵を産んだから死んだかなー。」と言う。Y子は自分の服や手に鈴虫がとまっても嫌がらない。また、ミニトマトの方に行き「こっちきてトマトににがしてやって。」と言う。保育者は、「お家帰るかなー？捕まえて逃がしてあげて。」と言う。Y子は鈴虫を捕まえてトマトにとませ「さよなら。」と言う。保育者はその様子を見守る。

【考察】

Y子は3歳の誕生日(9月3日)を迎え、登園時にぐずることもなくなり、友達との交流も穏やかなものになってきた。生き物に対しても興味を持ち、毎日いろんな生き物を見たり触ったりしている。

今回の記録では、鈴虫が自分の服や手にとまっても嫌がらなくなっている。また、鈴虫を「こっちきてトマトににがしてやって」と言ったり、トマトの所に持って行って「さよなら」と言っていることから、鈴虫に対する思いやりもうかがわれる。

4月は小動物が怖かったY子であるが、半年が経って生き物に対して興味関心をもって接することができている。これは、これまでの園環境で生き物に接する機会が豊富にあったため育っていったと考えられる。

事例6 落葉 観察日：10月

10月18日(水)：桜の木が少しずつ葉を落としている。Y子は葉を拾ったり捨てたりしている。保育者は葉っぱを「きれいな葉っぱ。」「赤ちゃんの葉っぱ。」と言いながら一緒に拾う。

M男、D男、R男(2歳児)、T男(4歳児)は幹の股に石を置いて遊んでいる。Y子はちらっと見るがD男と「こんなのあるよー。」と見せあったり、「ぬれとるけー。い

や。」と言いながら露でぬれている葉を捨てたりしている。

Y子は、石を置いたり、木の股から顔を出して、「こんにちは。」と言ったりしている。R男に「はい。」と言いながら石を置いたり、「ちがうちがう、やっぱりきれいな葉っぱ。」と拾ったり、砂場のふるいに入れたり、砂を入れて混ぜたりしている。保育者はY子の遊ぶ様子を見守りながら、「砂入れて何作るん？」と尋ねる。U男が砂ケーキを作ってY子と呼ぶ。保育者はU男に「あらー。大きなケーキができたなー。」と言って、一緒に喜ぶ。U男は、砂のケーキをスコップで半分に切る。保育者は「あーあー。」と言う。Y子はそれを見て、「あーあ、もういつかいつくらんといけん。」と言って、自分の持っている容器をひっくり返し、「いらん。」と言って捨ててしまう。

【考察】

Y子は目的を持たずに葉っぱを拾ったり捨てたりしていたが、保育者の「きれいな葉っぱ。」「赤ちゃんの葉っぱ。」という言葉がけにより、葉に興味をもって集めるようになり、拾った葉を友達と見せ合ったりしている。

砂で作ったケーキを壊されたら以前は喧嘩にまで発展していたであろうが、いまは自分の気持ちを言葉に表し、喧嘩にまで至っていない。友だちと喧嘩やトラブルを起こすことが多かったY子であるが、自然環境のなかで友達や保育者と共に過ごすことで、喧嘩やトラブルが少なくなり、回避できるようになってきている様子がかがわれる。

事例7 花と葉

観察日：11月

11月29日（水）：プランターと花壇に新しい花（ポリアンサ、葉ボタン、パンジー）が入り、Y子と2名の友達がそれを見て、「おはなかわいい。」「Y子ちゃんちこれがある。これもある。」「かわいい。おおきいのもある。」と言う。保育者は「かわいいねー。きれい？どんな？」と子ども達に聞く。子ども達が花を見ているのを見守りながら、うなずいたり共感したりする。

しばらくして、Y子はM男の持っている葉を見て、「M男くん、くれんのん」と言う。保育者は「そう。くれんのん。探しにいこう。」と誘い、葉を探しに行く。Y子は桜の木の下の葉っぱを拾い、きれいに重ねて持つ。保育者は上手に重ねて持っている事を認める。Y子が、「M男くん、ここでひろったん？」と言い、保育者は、「うん、ここで拾ったんよなー。」と返事をする。Y子は露がついている葉を拾い、「つめてー。」と言う。保育者は「露がついたんじゃなー。」と話す。

Y子は拾った葉を、そばにいたS男にあげ、さらにプランコで遊んでいるU子にもあげる。保育者はU子にあげに走って行ったことについて「あげたん？すごい。」と褒める。褒められたY子は、つぎにM男にあげようと走ってい

くが、M男に「もー、はっばいらん。」と言われる。

その後、Y子は葉を手を持ったまま遊び、S男にあげたり、クローバーの葉を取りに行ったりする。保育者はきれいに重ねた葉を大事に持っているY子に「どうする？」と聞く。Y子は「おちんように、もっとく。」と言い、U子が「ふくろにいれる。」と言ったので、保育者はY子とU子の葉っぱを各々ビニール袋に入れ、ピンクの布リボンテープで結ぶ。Y子は葉っぱの袋を約25分間持っていた。

【考察】

Y子は花壇に植えられた新しい花を見て、「おはなかわいい。」「かわいい。おおきいのもある。」と言っている。友達や保育者と共に花を見ることを楽しんでいる。このような体験を重ねながら人と共感することを学んでいくと思われる。

Y子は、M男の持っている葉っぱがほしくて探しに行っている。独占欲が強かったY子であるがこの場面では、我慢することができており、自分で解決策を見つかることもできている。

Y子は露がついている葉を拾い、「つめてー。」と言っている。五感を使って自然環境と触れることで、発見を楽しんだり考えたりしている様子がかがわれる。

Y子は拾った葉をいろんな友達にあげている。よく喧嘩していたM男にも葉を差し出している。M男に断られてもY子は我慢をしており、喧嘩やトラブルに発展しなくなっている。

事例8 もちつき、チューリップ 観察日：1月、2月

1月11日（木）：みんなでもちつきのためのたき木拾いに行く。

Y子は、下水溝を見て「かわ、したにながれている。」と言う。保育者はY子に、「まあよくみえたなー。ながれてるなー。」と認める。

神社の境内に着き、神前にみんなが並んで一斉にお参りをする。お参りの直前にY子は、「Y子おいのりしたんよー。まえに。」と言う。保育者は「お家で行ったん。よかったなー。」と応える。Y子は、「うん。」と言って手を合わせて頭を下げる。

みんなは再び山道を歩き、山の中腹まで来る。Y子は、K男（3歳児）と手をつないで歩く。M男（2歳児）がKY男（5歳児）におんぶしてもらっているのを見て、自分もK男におぶってもらおうとするが、同じくらいの体格のため、おぶることができず、「おめーんだー。（重いんだ）」と言われ、笑ってあきらめる。保育者はその様子を見守る。

休憩後、たき木拾いをする。Y子は、山道を上がったりが下がりたりして喜んで枯木などを集め、保育者の持っている袋に入れる。Y子は、「あー、はっば。」と言って緑の葉を拾う。保育者は「緑の葉はたき木にはならないよ。

焼いたらかわいそう。」と言う。Y子は、「うん。おうちにさしとく。」と言って持って帰る。下山中もずっと大事そうに持っている。時々落とすが、また拾って手に持つ。しかし、下水溝の所まで降りてくると、緑の葉を下水溝の中に流してしまう。保育者は「流したん。」と言う。そのまま園まで帰る。

1月18日（木）：1週間前に拾ったたき木を燃やして、みんなでもち米をふかしている。Y子を含む2歳児クラスの子ども達は保育者2名と話しながら見ている。保育者は、「この前、お山に散歩に行ったよなー。」と子ども達に話しかける。Y子は「いっぱいひろった。」と言い、M男もD男に「たき木、どんぐり。」と言い合っている。保育者は「みんなが拾ったたき木を燃やすと、もちのごはんができるんよ。」と話す。

もちつきが始まって、子ども達の祖父たち3人がつく。保育者は、もちつきの様子を子ども達と一緒に見る。R男が、餅つきをまだしていない自分の祖父のこと心配して、「ぼくのおじいちゃんつきゃよかった。」と言う。Y子は「おるが。」と言ってR男に言ったり、頭をなでたりする。保育者は、「おじいちゃんががんばりようよ。」と言いながらY子がなでている様子を見守る。R男の祖父が餅をつき始めると、Y子が「R男くんのおじいちゃんががんばってー。」と言う。R男が、「そとで、おもち、たべれる？」と言うと、保育者は、「うん食べような。今度はおばあちゃんが作ってくれてるよ。」と言う。その後、部屋に入りみんなでもちを食べる。

2月13日（月）：登園時にTちゃん（Y子の妹）が花壇のチューリップの芽を踏む。戸外遊びの途中、Y子は保育者のいる花壇に行く。保育者は、「チューリップの芽が出ていよ。みてごらん。今朝、Tちゃん（Y子の妹）が踏んでしもうたがなー。」と残念そうに言う。Y子は花壇の中を見て、「うん。これが。すながかかるとるよー。」と言いながら砂をはらおうとする。保育者は、「チューリップの芽よ。こんなチューリップが咲くんよ。」と絵の描いてある立て看板を見せる。Y子は「ふーん。」と言って少し見る。

N子、O子（1歳児）がS保育者と一緒に見に来る。D男（4歳児）も「いえにもチューリップうえとん。」と言いながら来る。保育者は「何色が咲くと思う？」と聞く。Y子は「わからん。」と言う。保育者は「あかちゃんに踏まんように言うてやってよー。」と言う。Y子は黙って椅子に座る。

U男がクリサンセマムの蕾を見つけて、「さいとるでーこれ。」と言う。保育者は「ほんとー。よう見つけたなー」と認める。Y子は「かわいいがー。こっちはまださいてねー。」「ここもーあるよ。」「かわいい、ちいさいな。あ

かちゃんみたい。」と言いながら、U男と次々に見つけていく。保育者は「ほんとー。」と一緒に見たり、うなずきながら指をさしたりする。

保育者はチューリップの球根が、土から出ているのを教え、「入れといてやろう。」と土をかける。Y子は保育者と一緒に土をかける。

【考察】

Y子は園外保育で緑の葉を拾い、途中で下水溝に流してしまうが、「おうちにさしておく」と言って大事に手に持ちながら帰る。

Y子は登園時に妹が花壇のチューリップの芽を踏んだことを覚えていて、保育者が話すとともに「これが、すながかかるとるよー。」と指を指してふるおうとしている。これらのことから、植物に対する思いやりが育ってきている様子がうかがわれる。

山でY子はK男におんぶしてもらおうとするが断られる。以前であれば、喧嘩やトラブルに発展していたが、Y子は笑って諦めている。また、もちつきの時に、R男が「ぼくのおじいちゃんつきゃよかった。」と残念がっていることに対し、Y子は励ましたり頭をなでたりしてやさしく気遣っている。また、「R男くんのおじいちゃんががんばってー。」と言って、友達のおじいさんが餅をつくのを共に喜んでいる。さらに、U男がクリサンセマムの蕾を見つけたことに対して、Y子は「かわいい、ちいさいな。あかちゃんみたい。」と言って、U男が蕾を見つけたことを喜び、共感している。

4月（2歳6ヶ月）は、朝、送ってきた母親から離れることが出来ず、クラスの子とは喧嘩やトラブルを良く起こしていたが、今（3歳5ヶ月）では、トラブルを回避したり、友達と共感したり、友達を気遣ったりすることができる様子がうかがわれる。

4. まとめ

1) 自然への興味

進級当初（4月）当初は、小動物には興味があるが、動く怖がっていた。しかし5月には触れないがテントウムシに声がけをし、6月には青虫を触ってカタツムリのケースを独占し、7月にはダンゴムシを大事に持って歩き、8月にはオタマジャクシからカエルになるとカエルを手の平に載せたり触ったりしている。植物に対しても、1年を通してホトケノザ・さくらの花・ポリアンサ・葉ボタン・パンジー・トマト・クローバー・チューリップ・クリサンセマム等いろいろな草花に触れている。11月に新しい花壇に花が植えられると関心をもって見つめ、3月には園庭のツクシを待っている。これらの様子から、自然への興味の育ちがうかがわれる。

2) 五感（視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚）の育ち

Y子は、ホトケノザ・さくらの花・ポリアンサ・葉ボタン・パンジー・トマト・クローバー・チューリップ・クリサンセマム、テントウムシ・青虫・カタツムリ・オタマジャクシ・カエル・カブト虫・鈴虫、石・砂等を見たり、手を使って触ったりして体験を通してかかわっている様子が見られる。また、五感（視覚：大きさ・色彩・形、触覚：温度感覚・重量感覚）を通して自然とのかかわりを楽しんでいる様子も見られる。

乳幼児期の成長発達には、視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚の五感が大切である。2歳児の子どもは自己中心的になる時期であり、何でも自分で体験してみないと理解することが出来ない。保育者は、安全に配慮しながら、子どもがおもしろいと感じたり、関わったりしたくなる環境をふんだんに用意することで、子供の主体的な遊びを支援し五感の育ちを促すことができると考えられる。

3) 生き物をいたわる心

筆者らは先の研究で、3歳児M男と自然とのかかわりについて、担任による1年間の行動観察記録をもとに考察を行った（斎藤ら 2018a, 2018b）。観察をした3歳児M男は、ミノムシから糞を取るのかわいそうと感じたり、冬眠中のカエルを何度も掘り起こしたり元に戻したりと、生き物を大事にする気持ちと、自分の好奇心を優先したい気持ちが混在する姿が見られた。観察をした3歳児M男は、生き物と接触を繰り返す中で2つの気持ちのバランスが徐々に整っていき、生命に対する倫理観が形成されていく発達段階にあると思われる。しかし、このような発達段階においても死の概念は持っており、死んでいる生き物や冬眠中のカエルに対して、いたわりの心を持って接している様子がうかがわれた。

2歳児Y子は、園で育てていたカタツムリが窓から落ちたことを心配したり（8月）、妹に踏まれたチューリップの芽を気かけたりしている（2月）。一方、死んだカブトムシに対して、「動かない」「寝ている」「転んだ」と表現したり、「ばっくする。わはは。わー。」と言って少し笑いながら遊んだりしている（8月）。2歳児Y子は、生きているものが落ちたり踏まれたりすると心配したり気かけたりするが、はじめから死んでいて動かない生き物に対しては、物のように扱ったり笑って遊んだりしている様子から、死の概念は育っていないと考えられる。2歳時のY子は、死の概念が芽生える前の段階にあると思われる。

4) 人間関係

4月当初のY子は自己中心的で、少しのことで大声を出したり、泣いたりして、友達とのトラブルや喧嘩も多かった。カタツムリ（6月）やダンゴムシ（7月）を独占したり、「M男もいろいろみ。T男はみちゃいけん。M男だけ。」と言いながら友達に差をつけたり、押し合いや奪い合いや順

番争いでトラブルになったりしていた（6月）。しかし、11月には拾った葉っぱを友達にあげたり、あげようとして断られても喧嘩やトラブルに発展していない。1月にはR男のおじいちゃんが餅をつかないことをR男が残念がると共に残念がってR男をいたわり、2月にはU男がクリサンセマムの蕾を見つけると共に喜んでいる。このことから、友達といっしょに自然にかかわることを通して、Y子の友達とのかかわりの育ちがうかがわれる。

以上のことから、園での自然体験や他者との交流が、粘り強さ、協調性、自制心、感謝する力といった非認知能力を培うことに影響を与えていることが伺われる。

討議

この研究は、岡山県Z地域保育協議会の13園の代表保育士とともに5年にわたり「心が育ち合う保育をめざしてー自然とのかかわりを通してー」について研究したものを資料としている。この研究にあたり、ご協力いただきました岡山県Z地域保育協議会の先生方に厚く御礼申し上げます。

文献

- 1) 斎藤健司, 友光有子, 高月教恵. (2018a). 3歳児と自然のかかわり（1）, 新見公立大学紀要 38(2), 11-17.
- 2) 斎藤健司, 友光有子, 高月教恵. (2018b). 3歳児と自然のかかわり（2）～保育者のかかわり方を中心に～, 新見公立大学紀要 38(2), 18-22.
- 3) 高月教恵, 山縣弘子, 大村久子, 原瀬生子 (2002a). 子どもの心の育ちと保育者のかかわり（1）: 0歳児の自然とのかかわりを中心に, 新見公立短期大学紀要 23, 25-33
- 4) 高月教恵, 佐藤照美, 三宅るり子 (2002b). 子どもの心の育ちと保育者のかかわり（2）: 1歳児の自然とのかかわりを中心に, 新見公立短期大学紀要 23, 35-44
- 5) 戸田淳仁, 鶴光太郎, 久米功一. (2014). 幼少期の家庭環境、非認知能力が学歴、雇用形態、賃金に与える影響. RIETI Discussion Paper Series 14-J-019.
- 6) 西坂小百合, 岩立京子, 松井智子. (2017). 幼児の非認知能力と認知能力、家庭でのかかわりの関係. 共立女子大学家政学部紀要 63, 135-142.
- 7) 野村総合研究所 (2015). 日本の労働人口の49%が人工知能やロボット等で代替可能に～601種の職業ごとに、コンピューター技術による代替確率を試算～. News Release 2015.12.2.
- 8) CB Frey, MA Osborne. (2013). The future of employment: how susceptible are jobs to computerisation? Technological Forecasting and

- Social Change 114, 254-280.
- 9) DS Weisberg, AK Kittredge, K Hirsh-Pasek, RM Golinkoff, D Klahr. (2015). Making Play Work for Education. *Phi Delta Kappan* 96 (8), 8-13.
 - 10) J Heckman (2000). Policies to Foster Human Capital. *Research in Economics* 54 (1), 3-56.
 - 11) J Heckman and V. Masterov. (2007). The Productivity Argument for Investing in Young Children. *Applied Economic Perspectives and Policy* 29 (3), 446-493.